

有限会社 新潟市民映画館 代表取締役 ^{さいとう まさゆき} 齋藤 正行 氏

自由な空間で在り続けること。 シネ・ウインドを通じて新潟を豊かに



PROFILE

1949年生まれ、新潟市出身。県立新潟高等学校を卒業後、大学進学で東京へ。1982年に帰郷し印刷会社に勤務する。1985年、有志と共に「新潟・市民映画館建設準備会」を設立し、同年「新潟・市民映画館シネ・ウインド」を開館。現在、万代シテイ商店街振興組合 副理事長、協同組合NICE新潟副理事長、安吾の会 世話人代表、舞踊家 井関佐和子を応援する会「さわさわ会」会長、(公財)新潟県文化振興財団 理事、(公財)新潟県生活衛生営業指導センター 理事、新潟国際アニメーション映画祭 実行委員会副委員長などを務める。
■世界の長編アニメーションが集まる第一回新潟国際アニメーション映画祭は、3月17日～22日まで開催（※詳細はP16「会議所からのお知らせ」へ!）

「新潟・市民映画館シネ・ウインド」は、公的なバックアップも受けず、市民会員が主体となって運営している映画館。「誰もが自由に関われる映画館」を実現し、映画だけでなくさまざまな活動に携わってきた齋藤代表に、お話を伺いました。



有限会社 新潟市民映画館(シネ・ウインド)
〒950-0909
新潟市中央区八千代2-1-1
万代シテイ第2駐車場ビル1F
TEL : 025-243-5530
<https://www.cinewind.com/>



開館当時はいつまで続くかと言われましたが、私の考えを理解し、信頼してくれた人たちが周りにいたからここまで来られたと思います

市民主体で50年続けていければ 新潟が豊かな地域に変わる

新潟・市民映画館シネ・ウインドが誕生したのは、1985年3月、新潟市古町にあった名画座・ライブが閉館したことに始まる。当時、映画評論家の荻昌弘氏が「あれほどの映画館を維持できない新潟で文化など口にはできるのか」といった一文を新聞に寄稿。その声を受けて立ち上がったのが齋藤代表だった。映画や演劇、文学愛好家らと共に準備会を発足し、一口1万円の出資を呼びかけて、全国でも例がない市民が運営する映画館、シネ・ウインドが同年12月に開館した。「非営利の映画館なんて続かないと言われたけど、市民が主体となってここを50年間続けていければ地域が変わる。新潟が豊かになるだろうと思いました」と齋藤代表は語る。

会員自身が運営の活動に参加。 自由に使える空間を維持したい

シネ・ウインドの最大の特徴が、年会費を払う会員が運営の活動に参加できるということ。上映作品の選定、会報「月刊ウインド」の編集、資料管理、広報など、さまざまな活動に会員がボランティアとして関わっている。そして、地域に根差した映画館として大切にしてきたのが「自由な空間を維持する」ことだ。「ここは映画を上映するだけでなく、劇場として芝居も落語も音楽もやります。自分たちがやりたいことをやれる、自由に使える空間というのが重要で、その空間を維持しようと言ってきました」。



2018年に座席をリニューアル。新潟市内の映画館で初めてフランス・キネット社製シートを導入した。さらに座席数を86席から64席+車いすスペースに変更し、ゆったりと映画を鑑賞できるようにした。

「ココだからできることを、これからも」

シネ・ウインドには会員以外にもさまざまな目的を持った人たちが訪れる。「新潟で新しいことを始めたいという人が来れば商工会議所に相談したり、会員になることを勧めています」と、当所の小規模企業振興委員も務める齋藤代表は、起業を目指す若者に支援事業を紹介するなど橋渡し役を務めてきた。

また、近年は専門家派遣制度を利用しITの活用や特設サイトを製作。2016年には小規模事業者持続化補助金の採択を受け、デジタルサイネージを導入するなど情報発信力の強化を図っている。「今は紙媒体よりもデジタルが普通だし、その必要性も分かります。ただ私のポリシーとして紙媒体は無くさない。両方できることが重要なんです」。

開館から38年目を迎え、齋藤代表が目指していた50年が近くに見えてきた。「ウインドに関わった人が、ここから離れて地域で活動していきますよね。そのときにウインドらしい思想が少しでも役に立てばいいなと思います」。シネ・ウインドが掲げる「ココだからできることを、これからも」という言葉通り、人と人を、人と街を繋ぐ拠点としてこれからも歩いていく。



シネ・ウインドではSNSなど時代に即したツールも使いながら、会報やリーフレット、フリーペーパーなどの紙媒体も重視。中でも月刊「ウインド」は開館当時からシネ・ウインドと会員を繋ぐ重要なツールとなっている。